

散策ガイド

松山市南西部コース
(明治二十八年十月七日)



① 朝寒あまからや
たのもとひびく
内玄関

② 男ばかりと見えて
案山子かかしの
哀あわれ也なり

③ 御所柿ごしょがきに
雄群祭おぐりの
用意かな哉

④ 鳩麦はとむぎや
昔通かよひし
叔父おしが家

⑤ 行く秋や
手を引き合ひし
松二木

⑥ 萩はぎあれて
百舌啼もすなく松の
梢こすえかな

⑦ 花木はなむくげ権
家ある限り
機はたの音

⑨ 見ゆるべき
御鼻ぎりも霧の
十八里

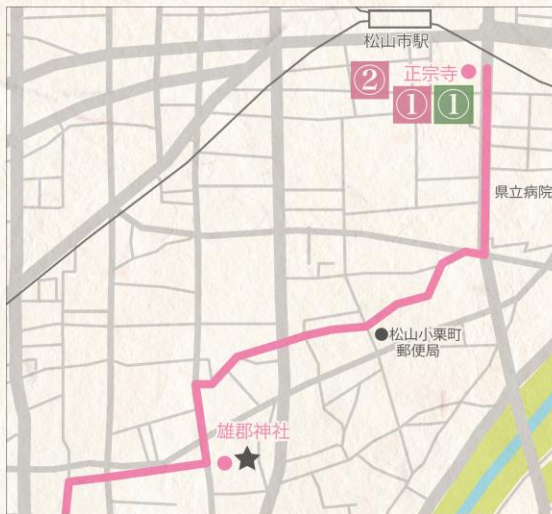
⑧ 方十町ほうじゅつちょう
砂糖木さとうぎの
野分のわけ哉

■ 留意点
このコースはすべて周ると一日かかります。休憩ポイント(★)で休憩をはさむか、一部のエリアだけを散策することを勧めます。

1

正宗寺エリア

しょうじゅうじ



みどころ

子規堂を訪れて、子規の直筆の作品や遺品を鑑賞しよう。



子規堂

正宗寺の境内にある子規堂は、子規が十七歳まで暮らした家を復元した建物です。子規堂内には、子規の直筆原稿や遺品などが展示されています。

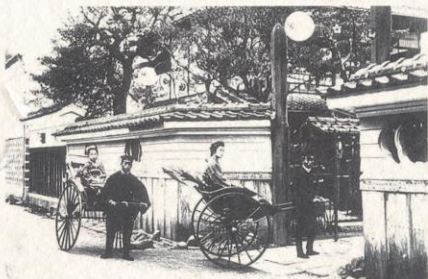


▲子規堂内に再現されている子規の勉強部屋

■ 当時の子規

子規は、十数日前から今出（垣生）に住む村上霽月（同コースの「4」村上霽月邸〈長楽寺エリア〉参照）に「私のところを訪ねて来てほしい」と何度も誘われていました。しかし、天気も体調も悪く、霽月邸を訪れることができない日が続いていた。

この日は、快晴で体調も良かったため、人力車で霽月邸まで出かけました。



▲人力車（明治末期頃）
（『創造都市まつやま』より）

この日のまち歩きについて

天気快晴心地ひろくすがすがしければ俄かに思ひ立ちて人車をやとひ今出へと出で立つ道に一宿を正宗寺に訪ふ 同伴を欲する也 一宿故ありて行かず

①

朝寒や

たのもとひづく

内玄関

朝冷えがする禪寺の内玄関で、誰かの「たのもうー」と言う声が響いている様子を表しています。

■ 正宗寺住職 釈仏海

霽月邸に向かう途中、子規は正宗寺に寄って住職の釈仏海を誘いました。仏海は子規の幼馴染で俳号を「一宿」といいます。

仏海は、子規の竹馬の友で、生涯にわたって交友を続けますが、この日は都合が悪く同行できなかったようです。

■ 「たのも」

「たのもう」のこと。武士等が他家を訪れた時の挨拶で、「たのみましよう」という意味です。

みどころ①

正宗寺境内にある子規堂を訪れて、子規の書いた原稿や絵を見てみよう。

みどころ②

正宗寺境内にある昔の「坊っちゃん列車」の客室に乗ってみよう。

※ 子規堂への入館には、大人は入館料五十円が必要です。



★ 雄群神社の境内に休憩できるスペースがあります。



みどころ

昔の田園風景を想像しつつ、雄群神社へと続く道を歩いてみよう。



▲昔の保免の宮(愛媛文化双書刊行会発行『子規と松山』より)
このエリアは、当時、辺り一面に田畑が広がっていたため、2キロ先の保免の宮(日招八幡大神社)がここからも見えたと言われています。

② 男ばかりと見えて
案山子の哀れ也

子規が雄群神社に向かっていると、稲の穂が実る田んぼの中に男性ばかりの案山子が立っていて、さみしい感じを受けた感じがうかがえます。

③ 御所柿に
雄群祭の用意哉

雄群神社を通りがかったときに、お祭り用の御所柿を準備している風景をしみじみと眺めていた感じがうかがえます。

雄群神社

雄群神社は、正岡家の産土神です。

産土神とは、生まれた土地を守護する神様であり、その土地に生まれた者を生まれた時から死ぬ時まで守ってくれると信じられています。

雄群祭

雄群神社のお祭りは、当時、毎年十月二十三日と二十四日に行われていました。現在は、毎年十月七日に行われています。

御所柿

御所柿とは、奈良県御所市原産の小ぶりの甘柿で、子規の好物でした。

みどころ③

子規とゆかりのある雄群神社の境内を探検してみよう。



▲昔の雄群神社



▲昔の農業の様子(『創造都市まつやま』より)



3

鬼子母神く手引き松エリア

きしぼしん



★ 本村公園内に休憩できるスペースがあります。



みどころ

子規も子どもの頃に遊んだ三島大明神の境内を散策しよう。



▲土居田の社 (「松山観光ボランティアガイドの会」のホームページ 四国・松山まち歩き観光より)

現在の本村公園の中に、当時、土居田の社がありました。子規も散策の途中でこの社に立ち寄ったようです。

④ 鳩麦や 普通ひし 叔父が家

はとむぎ

鳩麦や

普通ひし

叔父が家

鳩麦を見て、子どもの頃に書を習いに通っていた叔父の家を思い浮かべている様子を表しています。

■ 叔父 佐伯政房
子規の叔父政房は余戸に住んでいました。旧藩時代は上司に代わり文章を書く役目を務めた人物であり、御家流の書に優れていました。

■ 鳩麦
鳩麦は、イネ科の植物で、別の植物「ジユズダマ」と間違えるほど、この植物によく似ています。子規は後にこの句の「鳩麦や」の部分を「意改仁や」に改めました。



▲鬼子母神堂 (昭和45年頃撮影) (「松山観光ボランティアガイドの会」のホームページ 四国・松山まち歩き観光より)

みどころ④ 子規も立ち寄った鬼子母神堂の昔の写真と今の様子を見比べてみよう。

⑤ 行く秋や 手を引き合ひし 松二木

⑤

行く秋や

手を引き合ひし

松二木

手引き松を見て、子どもの頃に遊んだことを思い浮かべつつ、秋の終わりを感じている様子を表しています。

■ 手引き松
竹の宮と呼ばれていた三島大明神の境内には、松の木が二本並んでおり、その片方の枝が隣の松とつながっていました。

この二本の松は、まるで人が手をつないでいるように見えていたことから、「手引き松」と呼ばれていました。

みどころ⑤ 今も残されている手引き松を見てみよう。



▶手引きの松 (昭和四十五年頃撮影) (「松山観光ボランティアガイドの会」のホームページ 四国・松山まち歩き観光より)

せいげつてい



★ 空港東第三公園や奥土居神社の中に、休憩できるスペースがあります。

みどころ

松山の産業に大きくかかわった村上霽月や鍵谷カナにまつわる場所を訪れよう。



森円月

(二八七〇―一九五五)

森円月は、子規の幼馴染であり、漱石とも交友があった人物です。この日、子規は今出からの帰路の途中、森円月邸に寄り、左記の俳句を詠みました。

糶干すや 鶏遊ぶ 門のうち



▶ 森円月邸跡
(愛媛文化双書刊行会発行『子規と松山』より)

⑥ 萩あれて 百舌啼く松の 梢かな

はぎ
もず
な
こずえ

萩の花も散り、その上に架かる松の枝にモズが止まり鳴いていた様子がうかがえます。

村上霽月 (二八六九―一九四六)

村上霽月は、今出紘株式会社
の社長を務めた他、伊予農業銀行や愛媛県信用組合連合会を設立した人物です。

彼は、俳句を通じて子規や漱石とも交友がありました。霽月邸の庭には、風情ある築山があり、当時から有名でした。



▶ 霽月邸の庭 (昭和四十五年頃撮影)
(松山観光ボランティアガイドの会)のホームページ 四国・松山まち歩き観光より)

⑦ 花木槿 家ある限り 機(はた)の音

はなむくげ
はた

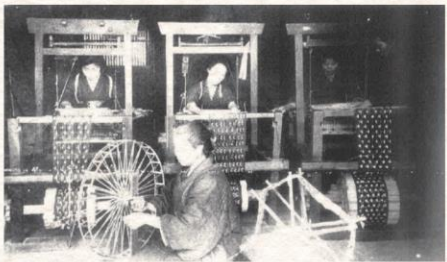
今出のまちに差し掛かると、どこの家からも紘を織る機の音が響いていた様子を表しています。(花木槿については「中川の川・石手川堤コース」の「大原恒徳邸・武家屋敷エリア」参照)

今出紘

今出紘は、江戸時代後期に今出(垣生)に住む鍵谷カナによって考案されたもので、明治になって全国的に普及するにつれて、伊予紘と呼ばれるようになりました。伊予紘は、一九八〇年に愛媛県指定の伝統的特産品となりました。

みどころ⑦

鍵谷カナの功績をたたえて作られた鍵谷カナ頌功堂を見てみよう。



▲今出紘を織る様子
(大正頃撮影) (『ふるさと松山』より)



5

重信川河口エリア



みどころ

重信川の土手に上がり、あたり一面を見わたしてみよう。



このエリアで詠んだその他の俳句

夕栄や 鱚の網に 人だかり

鶴鴿や 波うちかけし 岩の上

薯蕷積んで 中島船の 来りけり

⑧ 方十町

ほうじゅつちよう

砂糖木島の野分哉

のわけかな さとうぎのしま

■ 方十町

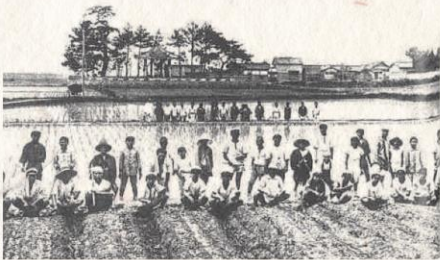
方とは方形、つまり四方のことであり、方十町とは、一キロ四方を表しています。

■ 砂糖木

砂糖木とは、松山の方言で、サトウキビのことです。

■ 野分

野分とは、台風のことです。



▼昔の街並み（昭和4年頃撮影）（『創造都市まつやま』より）
後方に鎌谷カノ頌功堂などが写っています。

⑨ 見ゆるべき

御鼻も霧の

十八里

浜辺一面に霧が立ち込めており、十八里先の佐田岬は見えにくかった様子がうかがえます。

■ 子規が見た島々

興居島の「伊予の小富士」（二二メートル）が右に聳え、伝説の島・由利島が、正面に見えたものの、十八里（七十二キロ）先にある伊予の御崎（佐田岬）は見えなかったようです。

みどころ⑧

重信川の河口から今出の海を見てみよう。



▲今出の海辺から見た景色（昭和45年頃撮影）
（「松山観光ボランティアガイドの会」のホームページ
四国・松山まち歩き観光より）